

# 94 吉祥寺山門



指 定 市有形文化財 平成10年 4 月1日  
 所在地 入 沢  
 所有者 吉 祥 寺



吉祥寺は入沢城跡の南斜面の麓にある曹洞宗の寺院である。慶応4年（明治元年、1868）3月火災になり、本堂・庫裡など11棟の大伽藍は灰になったが、山門は離れていたため残った。

山門は間口11尺の切妻造、銅板葺き（もと茅葺き）の四脚門である。軸部の形式をみると、親柱は円柱、控え柱は角柱とし腰長押（腰貫併用）を打ち、頭貫（木鼻付き）を通し、台輪を置き、組物は出組（実肘木付き）としている。妻飾りは、虹梁、大瓶束に笈形をつけ、懸魚は蓄懸魚とする。

天井は格天井で、扉上部の中央には蟄股（上方の荷重を支えるため、蛙の股の形をした部材）を置く、蟄股の内部彫刻は竹・虎の丸彫りで胡粉彩色が残っている。

建築年代は、正徳3癸巳年（1713）の惣門奉加牒がある。

建築の特徴は、まず、虹梁の渦や若葉を波しぶきの絵様にしている点である。波しぶきの絵様を用いるのは、宝暦前後の佐久地方の建築によく見られる手法である。次に蟄股の彫刻に彩色が施されている点である。軸部や彫刻に彩色を施すのは18世紀中頃までの建築の特色で、これ以降は彩色を施さない白木の建築が主流となっている。組物の肘木曲線が下端をわずかに削った程度で、木口を大きく見せている点も特徴である。

これらのことから、吉祥寺山門は、宝暦3年（1753）頃の建築であると思われる。建築以来250年以上経過しているが、建築材料および構造技術が立派であったから現在もしっかりした建築物として存続している。

（吉沢政巳工学博士調査による）